白百合学園中学校

二〇二四年度　国語　入学試験問題

問題は次のページから始まります←

※　字数制限がある問題は、「、」や「。」、カギカッコもすべて一字と数えます。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本で消費という言葉が肯定的な響きを伴って使われるようになったのは、一九六〇年頃のことではなかったかと思う。一九五六年になると日本の経済は、敗戦後の混乱を終息させ、いわゆる戦後の高度成長を実現しはじめる。その変化が人々の生活におよびはじめたのが、一九六〇年前後であった。ちょうど、a レイゾウコ、テレビ、洗濯機が三種の神器[注1]といわれた時代で、それらが家庭に入りつつあった。

その頃、スーパーマーケットも生まれている。それまでは商店と客とが、地域のつき合いをとおして買い物をするのが普通だった。それがスーパーの登場によって変わった。情報を集め、一円でも安い物を買う、それが「賢い消費者」だと言われるようになった。このような買い物の仕方を、人間関係にしばられない合理的な買い物[注2]と呼んだのである。

①この変化とともに、「広告」が大きな役割をはたしていくようになる。広告は人々に、さまざまな商品が存在することを教えただけではなかった。その商品を購入することによって「より進んだ生活」が手に入ることを私たちに告げたのである。洗濯機を購入することによって女性が洗濯から解放され、その結果手にした自由な時間を有効に使うとき、進歩した女性の人生があらわれる、というように。だから広告には、狭い意味での広告と、②広い意味のものがある。狭い意味の広告は、単なる商品のb センデン広告であるが、広い意味の広告は、雑誌や映画などさまざまなもの[注3]を動員しておこなわれる。たとえば、一九六〇年頃にはアメリカのドラマがよくテレビで放映されていたけれど、人々はそれをみることによって、「豊かな生活」とは何かを伝えられたのである。大きな自家用車、豊富な食料、電気製品に囲まれた暮らし、……。

多くのものを消費する多消費型社会は、商品の需要や供給の増加によってのみ生まれたわけではなく、「進歩」というイデ[注4]

オロギーと結びつくことによって展開した。多消費によって豊かさと自由が得られるというイデオロギーを社会に定着させることによって、である。（中略）

消費の時代とは、単なる消費量がふえていく時代ではなかった。それによって、社会のさまざまな面が変わっていく時代でもあったのである。しかもこの動きは、「進歩」という観念[注5]と結びついて、戦後の日本では展開された。だからこそ私たちは最近にいたるまで、疑うことなく消費を拡大させてきたのではなかったのか。

そして、それゆえに今日の私たちは、多消費型社会への懐疑とともに、戦後的な【　　】観に対しても疑いをいだいている。

先日、ある旅館に電話で宿泊の予約を頼んだ。男の人がでてきて、ちょっとした会話の後に予約が成立した。そのとき、不思議に新鮮な気がした。なぜなのだろうと考えてみると、電話で会話をしながら予約をしたのが久しぶりだったのである。

一年の間には、私は少なくても五、六十日はホテルや旅館に泊まっている。宿泊日数が百日を超える年もある。ところがこの数年、ほとんど電話で予約をしていない。いつの間にか、すべてインターネットでの予約に変わり、だから、予約するときに言葉が交わされることもなくなっていた。海外に行くときも最近では、c コウクウケンもホテルもインターネット予約で、旅行会社のd マドグチに行くこともなくなった。

このことによって、旅は確かに気軽なものになっている。［　I　］楽しくはなっていない。以前の旅には旅をつくっていく楽しさがあったが、いまでは商品を購入し使い捨てるように、旅を消費している。それがわかっているのにこのような旅のスタイルをとるのは、旅を準備する時間的、精神的な余裕がなくなっているからである。私たちが陥っているある種の貧しさが、効率のよい旅の準備を求めさせ、旅をも消費のe タイショウに変えてしまったと言えるのかもしれない。

インターネットの普及という文明の進歩は、旅の変化をみるかぎり、消費的世界の拡大のほうで機能してしまったのである。

現代文明は、たえず同じような現象を生みだしてきた。たとえば一九五〇年代の後半に入ると、日本の企業は、いっせいに技術革新を開始している。戦前から引き継がれた古い生産方法を一掃[注6]し、新しい技術を導入した工場がこの頃から動きだす。そのことによって、日本の製造業の生産効率は飛躍的に高まった。生産の増加が企業の利益を拡大し、その利益が人々の賃金を上昇させるとともに資本投資[注7]をもふやし、それがまた生産を拡大していく。市場経済の発展のうえでは、この上ない好循環が成立したのである。

そして、それもまた進歩という観念と結びついていた。歴史の発展、経済や社会の進歩、そういった観念につき動かされながら、人々は技術革新や高度成長を実現させていった。

だがその開始から半世紀が過ぎたいまでは、私たちは別の領域にも視野をひろげなければならなくなっている。なぜなら、この過程をへて、私たちの労働が使い捨てられる商品のようになってしまったからである。終身雇用[注8]、安定雇用といった言葉は、現在では一部の部門でしか通用しなくなった。そして、いつでも解雇できるアルバイト、パートタイマーばかりがふえ、フリーター人口は二百万人を超えている。正社員として雇用されても、いつリストラのタイショウにされるかわからない。

人間の労働が、企業の発展のための消費材にすぎなくなってしまったのである。

それを可能にした大きな基盤のひとつが、技術革新の結果生まれた単純労働のひろがりにあったことは間違いない。技術革新は、専門的な仕事の遂行能力を不必要にした。以前なら、どんな仕事でも一人前にこなせるようになるには、少なくとも数年の経験と相応の技術の修得が必要だったものが、いまでは若干[注9]のマニュアルを覚えればできるように変わっている。そのことが、不要になれば労働力を使い捨て、必要になれば補充するだけですむと考えるような企業を大量につくりだした。歴史の進歩であったはずの技術革新は、確かに企業を大きくし、市場経済を拡大した。その結果、私たちも、多くのものを消費し、子どもには膨大な教育費を投じ、気軽に海外旅行をするようになっている。だがその裏側では、自分自身の労働が消耗品、消

費材のようになっていくという事態も進行していた。それが今日の「豊かさのなかの不安」、あるいは「豊かさのなかの安定感のなさ」を生みだす。

技術革新もまた現代文明の発展のひとつであるとするなら、この文明の発展は、人間が追いつめられながら多くのものを消費しつづける、という現実をつくったのである。［　Ⅱ　］消費はうさばらしにはなっても、そこに③本当の楽しさを感じることはない。現在の私たちは、このような時代としての「消費の時代」を問い直さなければならなくなっている。

（内山節『内山節著作集14』一部改）

【注】

1 三種の神器……家庭生活でそろえておくと便利な三種の品物のたとえ。
2 合理的……むだを省いて能率よく物事を行うさま。
3 動員……ある目的のためにものを集めること。
4 イデオロギー……歴史的・社会的に形成されるものの考え方。
5 観念……物事に対する考え。
6 一掃……すっかり払い除くこと。
7 資本投資……資金を事業などにつぎ込むこと。
8 雇用……やとうこと。
9 若干……少し。

問一　――線①「この変化」とありますが、それはどのような変化ですか。次の**ア**～**オ**の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　地域での付き合いのために気が向かなくてもする買い物から、情報をもとにして欲しいものを積極的に購入する買い物に変化したこと。

イ　少し高くて品質のよい物を選ぶ買い物から、同じ物なら一円でも安く買おうとする買い物に変化したこと。

ウ　地域の店とのつながりを大切にする買い物から、情報を比較して値段の安さを重視する買い物に変化したこと。

エ　何も考えずに家の近くでする買い物から、一番安い店を調べて遠くてもわざわざ出かけて行く買い物に変化したこと。

オ　近所の小さな商店に毎日のように行く買い物から、遠くのスーパーマーケットでたくさん買いだめをする買い物に変化したこと。

問二　――線②「広い意味のものがある」とありますが、それはどのような広告ですか。次の**ア**～**オ**の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　店に置いてある商品だけを紹介するのではなく、店にはないたくさんの種類の商品を紹介する広告。

イ　商品自体を紹介するのではなく、その商品の購入によってよりよい生活が送れるようになることを伝える広告。

ウ　説明がわかりやすく、幼い子どもから高齢者まで幅広い年代に商品の魅力を伝えることができる広告。

エ　その商品を探している人だけでなく、あまり必要としていない人にもそのよさを伝えることができる広告。

オ　チラシだけでなく雑誌や映画などさまざまなものを使って、広い地域の人々に商品の品質や値段を伝える広告。

問三　本文中の【　】にあてはまる最も適切な言葉を次の**ア**～**オ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　生活　　**イ**　効率　　**ウ**　自由　　**エ**　進歩　　**オ**　人生

問四　本文中の［Ⅰ］・［Ⅱ］にあてはまる言葉を、次の**ア**～**オ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　だから　　**イ**　なぜなら　　**ウ**　たとえば　　**エ**　また　　**オ**　だが

問五　――線③「本当の楽しさ」とありますが、たとえば「旅の準備」の「楽しさ」とはどのようなことですか。本文の内容にそって、具体的に五十字以内で答えなさい。

問六　～～線「豊かさのなかの不安」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)　「豊かさのなかの不安」は、何によってもたらされたのですか。最も適切な言葉を、本文中から四字で抜き出して答えなさい。

(2)　「豊かさのなかの不安」とは、どのようなことですか。七十字以内で説明しなさい。

問七　═══線a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

恭一・次郎・俊三は三人兄弟である。父の俊亮のために一家は没落し、よその地に引っ越していたが、兄弟のうち次郎だけが母のお民の実家（正木家）に身を寄せていた。次の文章は、休暇中に父の実家（本田家）に遊びに来ていた次郎が、再び母の実家へ帰る直前の場面である。

「お祖母さん、次郎ちゃんはもう帰るんだってさあ、まだ休みが二日もあるのに。」

俊三が訴えるように言った。

お祖母さんは、しかし、それには答えないで、次郎のにこにこしている顔を、憎らしそうに見ながら、

「お前は正木へ行くのが、そんなにうれしいのかえ。」

次郎の笑顔は、すぐ消えた。彼は黙って次の間から出て来た父の顔を見上げた。

「何か、おみやげになるものはありませんかね。」

俊亮は、その場の様子に気がついていないかのように、お祖母さんに言った。

「何もありませんよ。」

と、お祖母さんは、きわめてそっけない。

「じゃあ、次郎、店に行って、壜詰めを三本ほど結えてもらっておいで。」

次郎はすぐ店に走って行った。

①「店の品じゃおかしくはないかい。それに重たいだろうにね。」

お祖母さんは、店の壜詰め棚が、このごろ寂しくなっているのをよく知っていたのである。
「なあに――」
と、俊亮はいったん火鉢のはたにすわって、ひろげたままになっていた手紙を巻きおさめながら、
「何か、次郎にやるものはありませんかね。」
「次郎に？　ありませんよ。」
「食べものでもいいんです。……もしあったら、お祖母さんからやっていただくといいんですが……」
お祖母さんは、じろりと上眼で俊亮を見た。それから、つとめて何でもないような調子で言った。
「飴だと少しは残っていたかもしれないがね。でも、珍しくもないだろうよ。毎日次郎にもやっていたんだから。」
俊亮は、もう何も言わなかった。そして、巻煙草に火をつけて、吸うともなく吸いはじめた。すると、その時まで黙っていた恭一が、お祖母さんのほうを見ながら、用心ぶかそうに、
「僕、次郎ちゃんに、こないだの万年筆やろうかな。」
「歳暮に買ってあげたのをかい。」
と、お祖母さんは、とんでもないという顔をした。
「ええ。」
「お前、どうしてもいると言ったから、買ってあげたばかりじゃないかね。」
「僕、赤インキをいれるつもりだったんだけれど、黒いのだけあればいいや。」
「また、すぐ買いたくなるんじゃないのかい。」
「ううん、色鉛筆で間にあわせるよ。」

「でも、次郎は万年筆なんかまだいらないだろう。」
「いらんかなあ。でも、次郎ちゃん、ほしそうだったけど。」
「あれは、何でも見さえすりゃ、ほしがるんだよ。ほしがったからって、いちいちやっていたら、きりがないじゃないかね。」
お祖母さんは、恭一に言っているというよりも、むしろ俊亮に言っているようなふうだった。
恭一は黙って俊亮の顔を見た。俊亮は、巻煙草の吸いがらを火鉢に突っこみながら、
「お前は、次郎にやってもいいんだね。」
「ええ……」
と、恭一は、ちょっとお祖母さんの顔をうかがって、あいまいに答えた。
「じゃあ、やったらいい。お前のは、また父さんが買ってあげるよ。」
お祖母さんは、ひきつけるように頬をふるわせた。そして、急に居ずまいを正しながら、
「俊亮や、お前は、あたしが次郎にやりたくないから、こんなことを言うとでもお思いなのかい。あたしはね、どの子にだって、いらないものを持たせるのは、よくないと思うのだよ。それに……」
俊亮は顔をしかめながら、
「ええ、もうわかっています。お母さんのおっしゃることはよくわかっています。しかし、私は、恭一のやさしい気持ちも買ってやりたいと思ったんです。次郎の身になったら、それがどんなにうれしいでしょう。兄弟の仲がそうして美しくなれたら、万年筆一本ぐらい、いるとかいらないとか、やかましく言う必要もないじゃありませんか。」
お祖母さんは、恭一のやさしい気持ちを買ってやりたい、と言った俊亮の言葉には刃向かえなかった。しかし、そのあとがいけなかった。次郎を喜ばせることは、お祖母さんにとっては、むしろ不愉快の種だったし、万年筆一本ぐらいどうでもいい

ようなふうに言われたのには、何としてもがまんがならなかった。

「ねえ俊亮や――」

とお祖母さんは声をふるわせながら、

「ほしがるものなら何でもやるがいい、と、お前がお考えなら、あたしはもう何も言いますまいよ。だけど、子供たちのさきざきのためを思ったら、ちっとは不自由な目を見せておかないとね。……何よりの証拠がお前じゃないのかい。一人息子で、あまやかされて育ったばかりに、お前も今のような始末になったんだと、あたしは思うのだよ。そりやあ、悪かったのはあたしさ。あたしの育てようが悪かったればこそ、ご先祖からの田畑を売りはらって、こんな身すぼらしい商売を始めるようなことにもなったんだろうさ。だから、あたしは、罪ほろぼしに、孫たちだけでもしっかりさせたいと思うのだよ。それがあたしの仏様への……」

お祖母さんは、袖を眼にあてて泣きだした。俊亮は、恭一と俊三とが、まん前にきちんとすわって、いかにも心配そうに自分を見つめているのに気がつくと、②さすがにたまらない気持ちになったが、あきらめたように大きく吐息をして、店のほうへ眼をそらした。

その瞬間、彼は、はっとした。[注1]一尺ほど開いたままになっていた襖のかげから、次郎の眼が、そっとこちらをのぞいていたのである。次郎の眼はすぐ襖のかげにかくれたが、たしかに涙のたまっている眼だった。

「次郎！」

俊亮は、ほとんど反射的に次郎を呼び、

「さあ、行くぞ。」

と、わざとらしく元気に立ちあがった。そしてマントをひっかけながら、

「じゃあ、恭一、万年筆はせっかくお祖母さんに買っていただいたんだから、大事にしとくんだ。」

それから、お祖母さんのほうを見、少し気まずそうに、

「お母さん、では、行ってまいります。」

お祖母さんは、まだ袖を眼に押しあてたまま、返事をしなかった。

「次郎ちゃん、今度はいつ来る？」

俊三は、重たそうに壜詰めをさげて部屋にはいって来た次郎を見ると、すぐ立って行ってたずねた。③恭一は、考えぶかそうに次郎を見ているだけだった。

「うむ――」

B

と、次郎は生返事をしながら、壜詰めを上がり[注2]框におくと、いそいで仏間のほうに行った。仏間には田舎にいたころのぴかぴかする仏壇がそのまますえてあり、その中に、まだ白木[注3]のままの母の位牌が、黒塗りの小さな寄せ位牌の厨子[注4]とならんで、さびしく立っていた。次郎はその前にすわると、眼をつぶって合掌した。

観音さまに似た母の顔が、すぐ浮かんで来た。お浜[注5]のあたたかい、そして励ますような眼が、それに重なって、浮いたり消えたりした。彼は悲しかった。つぶった眼から急に涙があふれて、頬を伝い、唇をぬらした。彼は、なんとなしに、この家の仏壇を拝むのもこれでおしまいだ、という気がしてならなかったのである。

「次郎ちゃん、父さん待ってるよっ。」

俊三が仏間にはいって来ていった。

次郎はあわてて涙をふいた。そして俊三といっしょに茶の間のほうに行きかけると、恭一が、足音を忍ばせるようにして、二階からおりて来た。彼は、俊三のほうに気をくばりながら、

「次郎ちゃん、ちょっと。」

と呼びとめた。

次郎が近づいて行くと、恭一は、梯子段をおりたところで、自分のからだをぴったりと次郎のからだにこすりつけて、ふところにしていた右手を、すばやく次郎の左袖に突っこんだ。

次郎は、脇の下を小さなまるいものでつっつかれたようなくすぐったさを覚えた。彼はそれが万年筆であるということを、すぐさとった。そしてうれしいとも、きまりがわるいとも、こわいともつかぬ、妙な感じに襲われた。

「何してるの。」

と俊三がよって来た。

「くすぐってやったんだい。だけど、次郎ちゃんは笑わないよ。」

恭一はやっとそうごまかした。そして、顔をあからめながら、変な笑い方をしていた。これは、しかし、恭一にしては④精いっぱいの芸当だった。

俊三は笑わない次郎の顔を、心配そうにのぞいて、

「怒ってんの、次郎ちゃん。」

次郎はますますうろたえた。が、こうした場合の彼のすばしこさは、まだ決して失われてはいなかった。彼は、恭一のほうにちょっと笑顔を見せたあと、いきなり俊三の脇腹をくすぐった。俊三はとん狂[注6]な声をたてて飛びのいた。同時に恭一と次郎が、きゃあきゃあ笑いだした。

「何を次郎はぐずぐずしているのだえ。感心に仏様にごあいさつをしているのかと思うと、そんなところで、ふざけたりしていてさ。行くなら、さっさとおいで。」

お祖母さんの声が、するどく茶の間からきこえた。俊三は、口を両手にあてて渋面[注7]をつくった。恭一は心配そうに次郎の顔を見た。次郎は、しかし、ほとんど無表情な顔をして、茶の間に出て行き、お祖母さんのまえにすわって、

「さようなら、お祖母さん。」

と、ていねいにお辞儀をした。そして、脇腹に次第にあたたまって行く万年筆の感触を味わいながら、元気よくカバンを肩にかけた。

本田の家を出てからの次郎の気持ちは⑤決して不幸ではなかった。俊亮は、自転車に壜詰めを結えつけて、それを押しながら家を出たが、町はずれまで来ると、次郎をいっしょにのせてペダルをふんだ。風は寒かったし、からだも窮屈だったが、次郎は、父のマントをとおして、ふっくらした肉のぬくもりを感ずることができた。

（下村湖人『次郎物語』）

【注】

1 一尺……約三十センチメートル。

2 上がり框……玄関の上がり口（段差）につけられた踏み板のこと。

3 白木のままの母の位牌……「位牌」は、亡くなった人の名前等を書いて、仏壇にまつる木の札のこと。「白木のまま」とは、位牌が仮の状態であるということ。

4 厨子……ここでは、先祖の位牌をまとめて入れてある箱形の仏具のこと。

5 お浜……乳母として次郎のことを育ててくれた女性。

6 とん狂……突然、その場にそぐわない調子はずれの言動をすること。

7 渋面……不愉快そうな顔つき。しかめっ面。

問一 〜〜線A「居ずまいを正し」、B「生返事」について、本文での意味として最も適切なものを、それぞれア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

A 居ずまいを正し

- **ア** 姿勢をまっすぐに直し
- **イ** 居心地（いごこち）の悪さを振（ふ）り切り
- **ウ** いすを正しい位置にもどし
- **エ** 怒（いか）りの気持ちをおさえ

B 生返事

- **ア** はっきりとした返事
- **イ** 考えぶかそうな返事
- **ウ** あいまいな返事
- **エ** 相手を否定するような返事

問二　――線①「店の品じゃおかしくはないかい。それに重たいだろうにね。」とありますが、これは、誰の、どのような意図を持った言葉ですか。最も適切なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　祖母の、店の品をみやげに持って帰らせたら、次郎が正木家で笑いものになるのではないかと心配する言葉。
イ　俊亮の、次郎がみやげとして重たい壜詰めをたくさん持って帰らなければならないことを気づかう言葉。
ウ　祖母の、本当は次郎に数少ない店の品物をみやげとして持たせたくない、という思いをごまかす言葉。
エ　俊亮の、本当は次郎にみやげを持って帰らせたくないと思っている祖母に対する当てつけの言葉。
オ　祖母の、次郎にもっと品質のよいものをみやげとして持たせてやりたいという愛情のこもった言葉。

問三　――線②「さすがにたまらない気持ち」とありますが、この時の俊亮の気持ちとして適切でないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　恭一の子どもらしく純粋（すい）な優しさが母に聞き入れられないことをかわいそうに思う気持ち。
イ　母が次郎に対して冷淡（たん）な扱（あつか）いをしているのを止められない自分を情けなく思う気持ち。
ウ　母の言う通り、自分が一家をおちぶれさせた原因を作ったことに対して申し訳なく思う気持ち。
エ　子どもたちの気持ちに寄りそわない母に、自分が何を言ってもむだだとあきらめる気持ち。
オ　恭一や俊三が母に対してなかなか自分の意見を言えないでいることをじれったく思う気持ち。

問四　――線③「恭一は、考えぶかそうに次郎を見ているだけだった。」とありますが、この時の恭一の気持ちとして最も適切なものを、次の**ア**～**オ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　次郎に対する俊三の遠慮（りょ）のない発言を、いまいましく思っている。

イ　祖母や父からしいたげられている次郎に同情している。

ウ　もう次郎と一緒に祖母の家に住めなくなるのを悲しんでいる。

エ　兄として次郎にどうしてやればよいのか思いなやんでいる。

オ　次郎が去って、祖母の家に俊三と二人で残されるのを不安に思っている。

問五　――線④「精いっぱいの芸当」とありますが、恭一がこのような行動をとったのはなぜですか。「芸当」の内容を具体的に示しながら、六十字以内で説明しなさい。

問六　――線⑤「決して不幸ではなかった」とありますが、それはなぜですか。理由を八十字以内で説明しなさい。

白百合学園中学校
二〇二四年度　国語　解答用紙

※　字数制限がある問題は、「、」や「。」、カギカッコもすべて一字と数えます。

受験番号
氏名

一

問一

問二

問三

問四　Ⅰ

Ⅱ

問五

50

問六　(1)

(2)

70

問七　a

b

c

d

e

二

問一　A

B

問二

問三

問四

問五

60

問六

80